

十年前の東日本大震災。名古屋市の映画監督今村彩子さんは、震災を経験したが、なぜ海の映像がずっと流れているか分からなかつた。今村さんは聴覚障害者で、画面に字幕がなく、危険を呼び掛ける音声が聞こえなかつたからだ。

宮城県聴覚障害者協会によると、会員九百七十九人のうち十四人が津波の犠牲になつた。聴覚障害者の死亡率は障害のない人の二倍といつて夕も。当時は聴覚障害者のことはほとんど報じられず、今村さんは同じ聞こえない立場で伝えたいと思い立ち、カメラを手に同県に入った。今村さんが見た避難所で、聴覚障害者は孤立していた。

## 視点

編集委員・五十住和樹



食事の提供、お風呂の場所や時間。生きるために重要な生活情報が聞き取れず、疲れても眠らず周囲の動きを探り続けた。行列ができるほどありあえず並ぶ。手話通訳者もいたが短時間で帰ってしまう

の防災環境はどう変わったのか。政府は福祉避難所の設置を促しガイドラインを作成。二〇一六年の熊本地震では、手話ができるスタッフをそろえた聴覚障害者の福祉避難所ができた。現地を見た今村さ

らも、「コミュニケーションが取りになる」と心配する。今村さん自身も「コミュニケーションが聞こえないからだ、と心の

### 震災と聴覚障害者の10年

## 障害の有無越えた関係を

ため、不安な気持ちを打ち明ける相手もない。今村さんと避難所を訪れた同県立聴覚支援学校の男性教諭は、「何も分からぬまま後回しにされていた卒業生たちがいた」と振り返っている。

それから十年。聴覚障害者は「情報とコミュニケーションが保障された理想的な環境」と感じたという。

だが、関西大学社会安全学部の近藤誠司准教授(四七)が昨秋に滋賀県草津市で行った調査では、災害時の避難先で福

祉避難所と答えた聴覚障害者が、いざというときに助け合

は9・6%。「迷惑をかけるかも、コミュニケーションができず嫌な思いをするかもとも」。例えば、一八年の西日本豪雨で広島県ろうあ連盟が立ち上げた災害ボランティアセンター。聴覚障害者と手話ができる健聴者が協力して被災した家の泥かきや片付けを手伝った。聴覚障害者宅だけでも、一般の家でも作業した。

その模様は今村さんも撮影。「障害者は助けられる立場と思いつ込んでいたが、助ける側にもなれる。被災者の力になりたいと思うのに障害は関係ない」と気付いたという。

今村さんは「この十年の被災地を映画『きこえなかつたあの日』に記録した。映像には、災害弱者の防災のヒントが詰まっている。

える関係の基礎になる。

一方で元気づけられる動きも。例えば、一八年の西日本豪雨で広島県ろうあ連盟が立ち上げた災害ボランティアセンターや、聴覚障害者と手話ができる健聴者が協力して被災した家の泥かきや片付けを手伝った。聴覚障害者宅だけでも、一般の家でも作業した。